

半井清と飛鳥田一雄

— 二人の市長の人物像をめぐって

戦後歴代市長

戦後復興期から高度経済成長長期にかけて横浜市長を務めたのは、石河京市・平沼亮三・半井清・飛鳥田一雄の四人である。石河と飛鳥田は日本社会党所属、平沼と半井は保守系であった。それぞれに市政に対する姿勢や人柄は異なっていたが、なかでも、半井清は内務省のエリート官僚出身、飛鳥田は弁護士で社会党左派の論客と、まさに対極的な二人だった。

この二人について、半井は人を寄せ付けない厳格さがあり、飛鳥田は開放的で親しみやすいと、対照的な評価がある一方で、それぞれ意外な一面を見せる場面もあった。二人にはそれぞれ自伝・伝記があるが、ここでは描かれていない面もある。

横浜市史資料室では、半井清と飛鳥田一雄が残した資料を所蔵している。市長在任中の他、その後や私的な資料も含まれる。それらの資料・写真からは、文化人たちとの交流など、これまであまり紹介されていない二人の人物像をうかがうことができる。

戦争が終わった時点の横浜市長は、半井清だった。内務省の官僚だった半井は、一八八八（明治二一）年岡山生まれ、神奈川県知事・大阪府知事などを歴任した後、退官、一九四一（昭和



開港百年祭国際仮装行列 右端半井清、中央平沼亮三 左内山岩太郎 1958（昭和33年）5月11日 半井清資料

一六）年二月に横浜市長に就任した。これは、いわゆる選任市長で、当時は横浜市会によって選ばれた。その後、戦時中を通して市長を務めた後、戦後一九四六年一月に半井は公職追放となり、市長を退いた。

翌年四月に行われた初めての市長選挙では、石河京市が当選する。一九五一年四月、石河は再選を目指したが敗れ、平沼亮三が市長に就任した。平沼は、二期目在任中の一九五九年二月に病死し、同年四月の市長選挙で、半井が勝利して再び市長に就任する。半井は一九五一年八月に公職追放が解除され、翌年一月から横浜商工会議所の会頭となっていた。

半井は、一九六三年四月の市長選挙で再選を目指す。保守陣営の調整が不調に終わり、市長選は、当時の横浜

商工会議所会頭田中省吾と、社会党の衆議院議員だった飛鳥田一雄の三つ巴の戦いとなった。そして、保守分裂を利して飛鳥田が当選するのである。市長に就任した飛鳥田は市民の支持を集め、その後三度の市長選挙はいずれも圧勝だった。しかし、四期目途中で日本社会党委員長に就任することになり、一九七八年三月に市長を辞した。

飛鳥田市長は、みなとみらいやベイブリッジ、港北ニュータウンなど大企業の実施に尽力し、また公害対策を推し進めるなど革新自治体の隆盛を導いたと評価されている。しかし、六大事業には、平沼市政・半井市政時の国際港都建設計画を引き継いだものもあり、戦後復興期から高度経済成長長期にかけての横浜の復興に関わる都市計画を、三代の市長にわたって推し進めたということもできるだろう。

市長秘書の証言

戦争と空襲、そして戦後の占領・接収で荒廃した横浜の復興は、石河以下戦後歴代の市長の共通した悲願であった。一方、市長が替わるごとに国際港都建設計画の内容は改訂され、また市政運営の進め方にも違いがあった。では、市政に取り組む姿勢の背景には、どのような人物像があったのだろうか。

はじめに、半井・飛鳥田の二代にわたって市長秘書を務めた河合共世さんの証言を見てみよう。当横浜市史資料室では、前身である横浜市史編集室当

時の二〇〇二（平成一四）年に、河合共世さんのインタビューを行った。その内容は、『横浜市史資料室紀要』第七号（二〇一七年）に掲載されている。

河合さんは、半井市長の最後の一年、半井および飛鳥田市長の在任一五年間、秘書課職員として市長と身近に接し、その人となりをよく知る貴重な存在である。河合さんによると、半井市長は秘書たちとは直接口をきかずにメモでやり取りをし、市長室に入ることができないのも局長以上であった。河合さんは市長室で執務していたが、市長室の中も終始「ピリピリしていい」と、たとえばカーテンが曲がっていると、机の上の物が「ピチツ」とそろっていいといけなかったという。

そんな緊張感の中で接していたため、河合さんは半井とは「人間的におつきあい」はできなかったと述べている。ところが、半井は河合さんが結婚すると聞くと、式を「公舎でやりなさい」と勧め、半井夫妻も式に出席した。結婚式当日半井は、「今日はいよいよだ」と声をかけて、河合さんを驚かせた。河合さんはインタビューの中で、「本当はやさしい方」なのに、周りが気を遣いすぎていたのかもしれないと述懐している。

一方の飛鳥田市長は、河合さんたち秘書にも気さくに声をかけ、市長室の人の出入も激しかった。人と話をするのが大好きで、とくに若い人や新聞記者たちと話すときには饒舌になったと

いう。また、仕事ぶりは、任せるところは人に任せつつも、非常に精力的に取り組み、夜も七時頃まで執務していた。気さくで開放的、かつ精力的な飛鳥田の人柄が伝わってくる。

河合さんは、飛鳥田市長時代「働いて嫌だと思ったことは一度もありませんでした。」と振り返っている。これも「飛鳥田さんがああいう方だったから」と、飛鳥田の人柄ゆえのことであったと述べている。人を寄せ付けなかった半井とはまったく対照的な人柄といえよう。しかし、半井も戦前の内務官僚出身という立場がそうさせていただけで、本来の人柄がどうであつたかは、河合さん自身にもよくわからなかつたのかもしれない。

半井清と文化行事

一九四六年、まだ河合さんと半井に接点のない頃だが、横浜市復興会の中山富久（翌年横浜市嘱託、後に社会教育課文化係長）が、戦後の皆さんだ民心を盛り立てようと芸能コンクール開催を計画した。中山が、半井市長にこのアイデアを持ち込んだところ、その場で「早速にやってみて宜しい」という返事で、実現するに至った（中山富久『文化をめぐる遍歴』第二書房、一九五二年）。一月二六日から開催された芸能コンクールには、国民学校二年生だった加藤和枝、後の美空ひばりも登場する。

芸能コンクールは、その後横浜市の

恒例行事となり、一九五三年からは横浜文化祭に発展した。横浜市の『市政概要』によれば、横浜文化祭という表現は一九七五年版まで使われているが、翌年以降は総合的な横浜文化祭という表現はなくなる。おそらく演劇や音楽など各分野それぞれの活動・行事が充実し、文化祭というまとまりの必要がなくなったためだろう。飛鳥田市長在任中、市民の文化活動が活発であったことがしのばれる。

ところで、一九四六年当時は内務官僚出身の選任市長だった半井が、芸能関係の行事を市が主催する計画を即座に認めたのは、意外と思えるかもしれない。だが、実は半井は、芸能・芸術関係の人びととの交友を広く持っていた。公務以外の半井の動向を見ると、半井のそんな一面を確認することができると、半井自身が残した資料や、元新



牧野勲（左端）と飛鳥田一雄（右から2人目） 飛鳥田をはさんと北林透馬・余志子夫妻 ホテルニューグランド 飛鳥田一雄資料

聞記者牧野勲の資料には、様々な文化行事・文化団体に参加する半井の様子が記録されている。

記者出身の牧野勲が、歴代市長の興味深い人物評を残している（『妻の味・おふくろの味』『馬頸楼雑記』有隣堂、一九八四年）。食事の席に同席した際の印象を語るなかで、それぞれの人柄を軽妙かつ的確に表している。まず飛鳥田については、「こだわらぬ飛鳥田一雄さん、なんでもおいしそうに食べる」が、「同席で飲み食いしても一向に楽しくない。」と、率直な感想を述べている。開放的な性格も、まじめ一本では面白くないというのだろう。

それに対して半井は、深夜に訪ねても、「ウイスキーの栓を抜き、手ずから目刺しを焼いて下さる半井さんが、家人を起こすまいと気を遣いながら、台所で音をひそめてガス台に向う後ろ姿は、独身時代を再現する。」と、意外に気さくな姿をほほえましいエピソードで紹介している。一方、平沼亮三は、「和洋の酒食を知りつくし」た「通人、粹人」で、「一番楽しかった」という。

牧野は戦後喫茶店三春（尾上町）を経営しており、一九五〇年一〇月、加賀料理飲食喫茶業組合を代表して横浜商工会議所の議員となり、五五年まで二期務めた。この間、一九五二年一月に半井が会頭となり、二人が共に文化行事・文化団体と関わっていくきっかけとなった。その後、牧野と半井は、家族ぐるみの付き合いをするように

なったという。牧野が一九七二年二月に亡くなると、半井が葬儀委員長を務めている。

日本愛妻会と横浜ペンクラブ

二人が最初に共に関わったのが、日本愛妻会というユニークな会である。以下、牧野・半井が関わった文化団体・文化行事について詳しくは、報告書横浜の文化人と戦後復興（横浜市史資料室、二〇一二年）を参照願いたい。

愛妻会は、商工会議所議員たちが日頃の妻の苦勞をねぎらいたいと思いつた集まりだった。牧野の他、半井やホテルニューグランドの野村洋三、市会議員の鈴木長之、さらに作家の北林透馬らを発起人とし、当初二月二〇日に結成式を開催した。半井が、



日本愛妻会5周年大会 市長公舎 背後に福富町の米軍施設返還跡地を望む 中央に平沼亮三名誉会長 1956（昭和31）年11月23日 半井清資料

商工会議所会頭に就任した直後のことである。以後、横浜の政財界・文化人を中心に年々会員を増やし、一九五八年には一七〇組を超える会員数となった。一九六〇年頃まで毎年趣向を凝らした例会を開催していた。

結成翌年には平沼亮三市長夫妻も入会して、平沼が愛妻会会長となり、一月の第二回例会では市長公舎を会場にガーデンパーティーを開いた。この後、半井市長時代も様々な行事の会場に市長公舎が利用される。始まりは平沼市長であったとはいえ、半井が河合さんの結婚式を市長公舎でやるうと言いつつ出した背景には、このような前例があったからであろう。

半井自身は、これらの行事を楽しんでいたと思われる。愛妻会結成当初の一九五二年、半井は年末の日記に「愛妻会ト云フモノガ藪カラ棒ニトビ出シテ被害甚大、未ダニヤラレテ居ル、鈴木長之、小林三郎ガ火元、北林透馬、牧野等々」と、牧野たちに担ぎ出されたことを自嘲気味にぼやいている。一九五五年には平沼の後を継いで愛妻会会長に就任し、翌年一月月に再任された後には、「又会長ニ指名セラレル、ヤレヤレ」と日記に書き記している。

しかし、その一年後、一九五六年暮れには、愛妻会等々の「北林透馬、牧野勲、鈴木長之、ペンクラブ一派トノツキ合ガ最近多クナツタ、ソレモヨカロウ」と、素直に楽しむ心境も吐露している。言葉とは裏腹に、実は最初か



万里昌代後援会発会式で挨拶する半井清
左は高木東六 右が万里昌代
1958(昭和33)年5月7日 半井清資料

ら喜んで参加していた節も見受けられる。あるいは、官僚出身で政治的な支持基盤を持たないだけに、選挙の際には支持者の一つになり得るという目論見もあったのかもしれない。実際、後の市長選挙には、その「ペンクラブ一派」が応援に加わっている。

ところで、ペンクラブとは、北林透馬や牧野勲らが中心となって、一九五三年七月に結成した横浜ペンクラブのことである。横浜ペンクラブは横浜文学散歩のような文学に関わる活動の他にも、ワグマン祭や伊勢ぶらザクの会などこの後長く続く行事の主催団体ともなった。戦後復興期から高度経済成長期にかけて、横浜の文化活動を支えた主要な団体の一つである。

文化人と半井清

横浜ペンクラブに対して愛妻会は、結成の経緯から言ってもより広い政財界の人びとを含む団体であった。この愛妻会と入れ替わるように登場するの

が、ヨコハマ話の波止場である。これもまた牧野と北林が中心となり、当時東京懇話会が話題の人を招いて話を聞く会を開いていたのを横浜でもやってみようと、一九五七年一二月にヨコハマ話の広場を開催したのが始まりだった。

当時横浜商工会議所会頭だった半井を世話人代表にかつぎ、翌年からは港にふさわしくヨコハマ話の波止場と改称し、一九七一年頃まで続いた。横浜でも、話題の人をゲストに招いたが、たとえば一九五八年二月の第三回には、横浜出身(生まれは満州)の俳優万里昌代を招いている。

これがきっかけとなったのか、五月には万里昌代後援会ができ、半井が後援会長に就いた。さらに翌年六月の第一八回話の波止場にも、再び万里を招いている。先の愛妻会の時と同様、半井は日記に「万里昌代後援会会長就任、イヤハヤ」と記している。だが、五月七日、有隣堂で開かれた万里昌代後援会発会式の写真を見ると、楽しい様子子がうかがえる。

この翌年一九五九年四月には、市長選挙があり、半井が出馬した。そして、話の波止場のメンバーが、地元神奈川の有力政治家である藤山愛一郎と共に演説会に登場している。歌手の佐藤美子や渡辺はま子、作詞家の高木東六らである。

半井の資料には、「34年 市長選関係」と題したノートが二冊あり、支持

者となりうる各種団体に並んで、愛妻会や話の波止場、そして個人でも、牧野・北林の他万里昌代等の名が記されている。市長選の支援者としての期待がうかがえる。

話の波止場と並行してもう一つ、半井の関わりの深い行事がある。一九五六年から始まる伊勢ぶらザクの会である。これは、川崎出身の詩人佐藤惣之助がよく立ち寄った伊勢佐木町の牛鍋屋蛇の目家で、命日の五月一日に惣之助を偲んで牛鍋を食べようという会であった。ペンクラブや話の波止場のメンバーが参加し、半井も毎回のように参加した。

このことについては、詩人の高見保太郎が文章を残している。高見はまず、話の波止場の世話人代表に半井が推された際、「同氏も喜んで応諾してくれた」と述べている。そして、半井を「根っからの文化人」で「誠実温厚」と評している。ザクの会には、「毎年必ず」出席し、一九八二年、半井が九四歳の年にも出席したが、乾杯の音頭をとっただけですぐに帰り、それが最後となったと振り返っている(『横浜文芸懇話会会報』No.41、一九八三年五月)。半井は同年九月三日に亡くなる。

高見の証言は、文化人の側からの半井の人物像といえるだろう。市長としての顔しか知らない河合さんとは、まったく異なる印象といえよう。話の波止場やザクの会には、作家・詩人・歌人・俳人・画家・歌手等が集まって



舟方一追悼 詩の講演会 左手後列に飛鳥田夫妻 右端に高見保
太郎 その左に北林透馬 1957(昭和32年)年10月16日
飛鳥田一雄資料

おり、こうした文化人と半井は長い交流を重ねていく。こうした文化への志向が、市長として芸能コンクールを受け入れた背景にあったのである。

飛鳥田一雄と労働者文化

一方、飛鳥田一雄は、横浜交通労働組合・横浜水道労働組合など強固な支持基盤に加えて、「一万人市民集会」を公約に掲げるなど、市民に開かれた市政を目指す姿勢が支持されていた。半井とは対照的に市長室のドアはいつでも開いているという開放的な姿勢は、市民の人気を呼んだのである。

飛鳥田は一九一五(大正四)年、横浜市議員も務めた弁護士飛鳥田喜一の子として横浜で生まれた。横浜の名門中学である神奈川県立横浜第一中

学校(神中、現希望ヶ丘高校)を出て、明治大学を卒業し、弁護士となった。神中は政財界人や文化人など数々の人材を輩出しており、飛鳥田の同級生には文芸評論家寺田透がいる。飛鳥田は後に寺田の妹幸子と結婚する。飛鳥田は横浜の名門の出であり、半井とは違った意味でエリートであったといえるだろう。

牧野の人物評にもあったように、こうした出自は真面目な堅物という印象を与えるが、飛鳥田もまた学生時代には映画研究会に所属し、戦後間もなく地元磯子で磯子文化会に参加していた。そこには、寺田透や飛鳥田の他、劇作家神谷量平、俳人の古沢太穂らがいて、磯子から文化を発信しようと盛んに活動していた。地元で、神谷・飛鳥田・古沢らも出演して、演劇「坊ちゃん」を上演したこともあった。なお、磯子文化会については、葛城峻氏のご教示による「太穂哀惜」「かおす通信」第33号、二〇〇〇年三月他)。

一九四六年八月、飛鳥田・古沢の他、作家岩藤雪夫、詩人の舟方一・松永浩介・山田今次らによって京浜労働文化同盟が結成され、『京浜文学』が創刊された(第四次『京浜文学』第二四号、二〇一四年六月)。戦前のプロレタリア文学の継承を志し、労働者の文学・文化を目指すものであった。『京浜文学』は、神谷が亡くなる二〇一四年まで引き継がれていた。

戦後、こうした労働者の文化活動が

盛んで、横浜でも一九四七年三月に労働組合の文化部などが中心となって横浜民主文化連盟が結成された。当時の石河京市市長は六月六日に、働く市民の文化懇談会を開催し、その提言に基づき、同年八月の貿易復興祭にあわせて、「働く市民の六大文化祭」が、市と神奈川新聞社共催で開催されることとなった。市民納涼仮装文化祭や女子野球大会などが、華やかに開催された。

市長と文化人

石河・飛鳥田らにとっては、プロレタリア文化運動の流れをくむ労働者文化運動という要素が強かったが、それに連なる文化人たちの交友や協力は続いていた。市長在任中の飛鳥田の周囲には、寺田透の他、横浜演劇研究所所長加藤衛やオペラ歌手佐藤美子ら



佐藤亜土の結婚式に出席した飛鳥田夫妻(左手) その左に大
仏次郎 右から2人目が佐藤美子
1967(昭和42)年7月1日
飛鳥田一雄資料

芸術・文化方面の人びとが常にいて、文化行政のブレインとしての役割を果たしたのである。

こうして二人の市長の文化人たちの交友ぶりを見てくると、内務官僚出身のエリート、あるいは生真面目な左派の論客といったそれぞれのイメージとはやや異なる、文化・芸術方面への志向がうかがえる。一方、その内実はやはり対照的であった。半井は趣味的要素が強く、飛鳥田は労働者文化(後には市民文化)という政治理念に基づき理想があった。ただ、それぞれ交友のあった文化人たちには重なる人びとも多かった。佐藤美子などは、その代表である。

佐藤美子は、飛鳥田市長時代の市の公式行事にたびたび出席し、飛鳥田の中国訪問にも同行している。また、佐藤美子の子息佐藤亜土(洋画家)の結婚式には、大仏次郎らと共に飛鳥田夫妻が出席している。なお、大仏次郎記念館の開設に飛鳥田が尽力したのも、周知のことである。

市長と文化人の関係は、政治的な理念というよりは、人柄や日頃の交友のなかで培われたものであっただろう。その点、二人の市長は、対照的な人柄であったが、それぞれ多くの交友関係を持っていた。そうした関係性のなかにも、二人の人物像の一面を見ることが出来る。そして、結果として文化行政にも、少なからず影響を与えたといえるだろう。

(羽田博昭)